

生態系に被害を及ぼすおそれのある宿根草（第2回）

職藝学院

教授 渡邊 美保子

環境省が作成した「我が国の生態系に被害をおよぼすおそれのある外来種リスト」には「その他の総合対策外来種」として、庭園で利用される宿根草もいくつか掲載されています。生態的な特徴をみると、ほとんどがこぼれダネで広がってゆく種類です。種子が風で運ばれて庭園の外で定着して移動してゆきます。特に半自然草地や休耕地、河原などに逃げ出していく宿根草には注意が必要です。

「その他の総合対策外来種」のひとつにバーベナ・ボナリエンスがあります（写真1）。紫色の小花が密集して空中に浮かんでいるように咲きます。草丈が高くなるにもかかわらず、支柱が不要のため、花壇の後列などに配置することができます。宿根草庭園内では、こぼれたタネが他の宿根草の株と株の隙間から発芽して思いもよらない自然風なデザインになります。開花は5月から10月と長期に渡るため、種子を作る期間も長くなります。風で飛んだ種子が河川敷や、道路沿いなどで繁殖して分布拡大するため、このような環境の近くには持ち込まないように環境省は警告しています。最近では、低湿地や林道沿いにも拡大しているようです。



写真1 バーベナ・ボナリエンス。「その他の総合対策外来種」のひとつ。クマツヅラ科。南アメリカ原産。高さは150cm程度。開花期は5月から10月。1930年頃渡来。

リストに掲載されているそのほかの宿根草をみると、ユーパトリウム‘チョコレート’、フランスギク、ヒメヒオウギスイセン、ヒメツルソバ（写真2）など、

庭園に取り入れられているなじみの深い種類が含まれています。観賞用に栽培されていたものが各地で野生化しています。

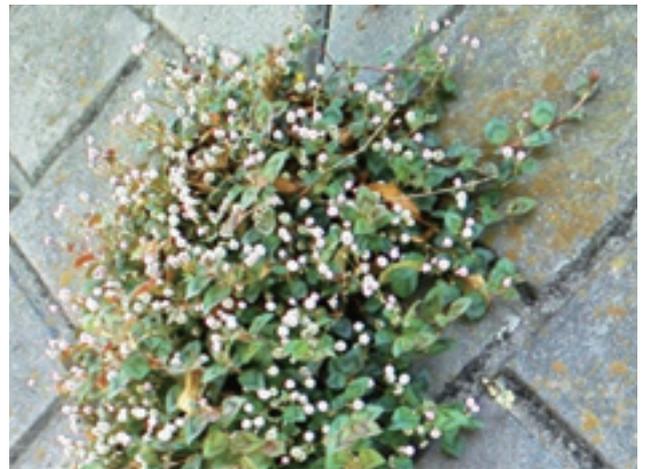


写真2 ヒメツルソバ。「その他の総合対策外来種」のひとつ。タデ科、ヒマラヤ原産。水平、垂直方向に伸びる。開花期は4月から12月。写真ではコンクリートの隙間に種子が入り込み下垂している。庭園ではグランドカバーとして利用されている。自然の岩場に侵入して雑草化する可能性があるため、このような場所には持ち込まない。明治中期に渡来。

近年、草丈の高い宿根草を草原のように自然風に植栽する、ナチュラルスティックガーデンが流行して、日本の庭園デザインに影響を与えています。様々な宿根草の花の形や色、草姿、開花期間を計算して組み合わせたデザインはとても美しく、季節の移ろいを感じさせてくれます。しかも、花が終わった姿までもデザインの一部分として愛でて、植物本来の姿を最後まで楽しめます。これまでの宿根草花壇では、花が終わると種類ごとに切り戻して整えるお手入れをしますが、このデザイン手法では枯れるまで庭園に据え置かれ、冬に枯れた茎を一斉に株元から切る管理をします。その結果、もし、こぼれダネで繁殖する種類があれば、結実した種子が拡散してしまう可能性が大きくなると考えられます。ナチュラルスティックガーデンの手法で宿根草を植える場合は、海外のデザインをコピーしてしまうのではなく、これらの宿根草が逃げ出さないか注意しながら利用することも、これからのガーデニングには重要な視点となるでしょう。